

なった」と説明しただけのことはある。もちろんテーマだけではない。人間コマ撮りというアイデアが、すばらしい効果をつくりだしている。「隣人」はアメリカ



「ナルシス」の製作で振り付け師、カメラマンと打ち合わせるマクラレン(中央)。右端は主人公を演じるジャン=ルイ・モラン(NFB)。

カのアカデミー賞を受賞した。

一九五〇年代に私たちはささやかな研究グループをつくり、日本で公開されない名作をさがしては見ていた。「隣人」もその機会に見たわけで、以来マクラレンの名はいつも私の頭の片隅にあった。幸いにも、その頃東和映画がマクラレンの映画を輸入して長編映画につけて封切った。「Blinking Blank」(一九五五)が「線と色の即興詩」、「Rhythmic」(一九五五)が「算数あそび」、「A Chairy Tale」(一九五七)が「たすね椅子」、「Le Merle」(一九五八)が「小鳥のファンタジー」といったスマートな日本語題名は、そのときつけたものである。

私のマクラレンとの出会いは、彼の親

友グラント・ムンロのおかげである。一九六五年、私はユネスコの会議でポロランドに行ったが、世界の美術映画を話し合うその会議にカナダから来ていたのがムンロであった。翌六七年、モントリオールでNFBの彼を訪ねたとき、その紹介で私はマクラレンを知ったのである。

マクラレンは早速、当時製作中の「Pas de Deux」のラッシュをムウイオラで見せてくれた。翌年訪ねたときもまだ完成していなかった。十数分の映画に一年も二年もかける彼の慎重で丁寧な仕事ぶりに敬服し、それを許すNFBを羨しいと思つた。それがルーミアの民族音楽と結びついて、すばらしい重ね焼きのストロボ的な画像が展開するのを見たのは、さらにその翌年だった。

マクラレンのすばらしさは、まず奇抜な技法から出発することである。カメラを使わずに、フィルムに直接絵を描いたり、膜面に釘や針でキズをつけたり、横縞をサウンド・トラックに焼付けてマイクを使わずに音をだしたり、フィルムの右端から左端へ斜めに長い線をひくだけで一本の縦線が右から左へ動いていくのを見せたり、二枚の絵を深いオーバーラップでつないでその間がうごくようにみせたり、ナマの人間をコマづつ撮って全くあり得ない動きをつくりだしたりする。まず技法ありき、なのだ。

しかしその技法を技法だけに終らせず、すばらしい効果にまとめあげるためのもう一つのアイデアを加えること、さらにそれを緻密な技術で完成させることが必

ず結びつく。一つの技法はつぎの技法を生むヒントになっている。「カノン」は輪唱のように少しずらせた重ね焼きで、後のイメージが前のイメージを追っかけていく効果をつくりだしたが、これをヒントにもっと発展させたのが「パ・ド・ドゥ」だった。そのバレエの踊りをややスロー・モーションにすることで、全くエレガントな動きをつくりだしたのが「パレー・アダジオ」(一九七二)だ。

さてこんどの「ナルシス」もまたバレエである。踊りの動きを、画面をとばしたり重ねたり、自由自在に別のうごきに作りかえているというからおもしろい。話には三部に分かれていて、その最後の部分で絢爛たるテクニクを見せるのだという。

一九七八年に訪ねたとき、彼はギリシヤ神話のナルシスをやるつもりだと抱負をきかせてくれた。ナルシスなら水鏡に



「ナルシス」の一場面(NFB)。

うつる自分の美しさに感動するのだから、当然ここは重ね焼きや鏡を使うのだろうと想像した。翌年モントリオールで電話したときも、まだ構想を練っている段階ときき、その慎重さはいつものことと納得した。確信のもてるどころでなければ形にしないのだ。

一九六六年、モントリオールの彼のマシオンで会ったとき、一緒だった製作

部長のガイ・グロウヴァーも親友のグラント・ムンロも大いにはしゃいで、私も負けずに大声をたてたが、ひとりマクラレンだけはささやくように喋るのを、あとで私は彼が心臓の持病をいたわっているせいだと知って悪いことをしたと思つた。彼はまた人一倍責任感が強いと思つたが、一九七〇年、川喜多かしこさんに日本へ招待された時、出発直前に足を滑らせて肋骨を折ったというのに、約束を守って日本に来て、スケジュール通り岩波ホールで講演した。ユーモアたっぷりな彼の話を、客席いっぱい聴衆は大いにたのしんだが、肋骨の折れたからだとは、誰一人知らなかったはずである。

ノーマン・マクラレンの偉大さを言いつくすことは難しい。奇想天外なアイデアも緻密な技術も、それらを結びつけるスタイルも、すべては彼の豊かな感受性から来ているということになるが、その根底にはやはり聖なる作家精神があると言うのが正しかろう。マクラレンの秘密は、どんなモノにも生命力をもたせる造物主的な能力である。彼の手にかかると椅子も人間に甘えたりスネたり泣いてみせたりするではないか。数字だつていたずらをしたり怒ったりするし、マイクだつて頑固に人間に反抗してみせるではないか。アニメーションが本来モノに生命を与えることならば、マクラレンこそ真の意味でアニメーション作家の名に値すると言ふべきだろう。引退の声明をきいて、もう一度彼の一作一作を見直したい衝動に駆られている。